

HUMAN LOST

太宰治



思いは、ひとつ、窓前花。

十九日。

十三日。 なし。

十四日。 なし。

十五日。 かくまで深き、

十六日。 なし。

十七日。 なし。

十八日。

ものかいて扇ひき裂くなごり哉なごり

ふたみにわかれ

十月十三日より、板橋区のとある病院にいる。来て、三日間、齒ぎしりして泣いてばかりいた。銅貨のふくしゅうだ。ここは、気がいい病院なのだ。となりの部屋の若旦那わかたんなは、ふすまをあけたら、浴衣ゆかたがかかっている、どうも工合いがわるかった、など言って、みんな私よりからだが丈夫で、大河内昇とか、星武太郎などの重すぎる名を有し、帝大、立大を卒業して、しかも帝王の如く尊嚴の風貌ふうぼうをしている。惜しいことには、諸氏ひとしく自らの身の丈たひよりも五寸ほどずつ恐縮おそくしていた。母を殴った人たちである。

四日目、私は遊説ゆうせいに出た。鉄格子と、金網かなあみと、それから、重い扉、開閉のたびごとに、がちゃん、がちゃん、と鍵かぎの音。寝ずの番の看守、うる、うる。この人間倉庫の中の、二十余名の患者すべてに、私のからだを投げ捨てて、話かけた。まるまると白く太った美男の、肩を力一杯ゆすってやって、なまけもの！と罵ののった。眼のさめて在る限り、枕頭の商法の教科書を百人一首を読むような、あんなふしをつけて大声で読みわめきつつづけている一受験

狂に、勉強やめよ、試験全廃だ、と教えてやったら、一瞬ぱつと愁眉をひらいた。うしろ姿のおせん様というあだ名の、セル着たる二十五歳の一青年、日がな一日、部屋の間、壁にむかつてしょんぼり横坐りに居崩れて坐つて、だしぬけに私に頭を殴られても、僕はたった二十五歳だ、捨てる、捨てる、と低く咳きつづけるばかりで私の顔を見ようとさえせぬ故、こんどは私、めそめそするな、と叱つて、力いっぱいうしろから抱いてやつて激しくせきにむせかえつたら、青年いささか得意げに、放せ、放せ、肺病がうつると軽蔑して、私は有難くて泣いてしまった。元氣を出せ。みんな、青草原をほしがっていた。私は、部屋へかえつて、「花をかえせ。」という帝王の咳きに似た調子の張つた詩を書いて、廻診しに来た若い一医師にお見せして、しんみに話合つた。午睡という題の、「人間は人間のとおりに生きて行くものだ。」という詩を書いてみせて、ふたりとも、顔を赤くして笑つた。五六百万人のひとたちが、五六百万回、六七十年つづけて嘔き合っている言葉、「氣の持ち様。」というこのなぐさめを信じよう。僕は、きょうから涙、一滴、見せないつも

りだ。ここに七夜あそんだならば、少しは人が変わります。豚箱などは、のどかであつた。越中富山の万金丹でも、熊の胃でも、三光丸でも五光丸でも、ぐつと奥歯に噛みしめて苦いが男、微笑、うたを唄えよ。私の私のスウィー トピイちゃん。

あら、

あたし、

いけない

女？

ほらふきだとき、

わかっているわ

よ。

虹よりも、

それから、

しんきろつよりも、きれいなだけれど。

いけない？

一週間、私は誰とも逢っていません。面会、禁じられ

て、私は、投げられた様に寝ているが、けれども、これは熱のせいで、いじめられたからではない。みんな私を好いている。Eさん、一生にいちどのたのみだ、はいって呉れ、と手をつかぬばかりにたのんで下さって、ありがと。私は、どうしてこんなに、情が深くなつたのだろう。Kでも、Yでも、Hさんでも、Dはうろろろ、Yのばか、善四郎ののろま、Y子さん。逢いたくて、逢いたくて、のたうちまわっているんだよ。先生夫婦と、Kさん夫婦と、Fさん夫婦、無理矢理つれて、浅虫へ行こうか、われは軍師さ、途中の山々の景色眺めて、おれは、なんにも要らない。

乃公だいこういいでずんば、蒼生そうせいをいかんせむ、さ。三十八度の熱を、きみ、たのむ、あざむけ。プウシュキンは三十六で死んでも、オネエギンをのこした。不能の文字なし、とナボレオンの歯ぎしり。

けれども仕事は、神聖の机で行え。そうして、花を、立ちただかつて、きっぱりと要求しよう。

立て。権威の表現に努めよ。おれは、いま、目の見えなくなるまで、おまえを愛している。

「日没の唄。」

蝉せみは、やがて死ぬる午後に気づいた。ああ、私たち、もっと合せになってよかったのだ。もっと遊んで、かまわなかったのだ。いと、せめて、われに許せよ、花の中のねむりだけでも。

ああ、花をかえせ！（私は、目が見えなくなるまでおまえを愛した。）ミルクを、草原を、雲、（とつぷり暮れても嘆くまい。私は、なくした。）

「一行あけて。」

あとは、なぐるだけだ。

「花一輪。」

サインを消せ

みんなみんなの合作だ

おまえのもの

私のもの

みんなが

心配して心配して

やつと咲かせた花一輪

ひとりじめは

ひどい

どれどれ

わしに貸してごらん

やっぱり

じいさん

ひとりじめの机の上

いいんだよ

さきを歩く人は

白いひげの

羊飼いのじいさんに

きまっているのだ

みんなのもの

サインを消そう

みなさん

みなさん

おつかれさん

犬馬の労

骨を折って

やつと咲かせた花一輪

やや

お礼わすれた

声をそろえて

ありがとう、よ、ありがとう！

(聞えたかな?)

二十日。

この五、六年、きみたち千人、私は、ひとり。

二十一日。

罰。

二十二日。

死ねと教えし君の眼わずれず。

二十三日。

「妻をのしる文。」

私が君を、どのように、いたわったか、君は識しっているか。どのように、いたわったか。どのように、賢明にかばってやったか。お金を欲しがったのは、誰であったか。私は、筋すじ子こに味あじの素もとの雪ゆききらきら降ふらせ、納な豆まめに、青あおのり、と、からし、添そえて在あれば、他ほかには何も不足ふそくなかつた。人を悪わるしざまにのしつたのは、誰であったか。闇やみの審判しんぱんを、どんなにきびしく排撃はいげきしても、しすぎることはない、と、とうとう私わたしに確信かくしんさせてしまったほどの功こう労者らうしやは、誰であったか。無智むちの洗濯せんたく女によよ。妻つまは、職業しごくでない。妻つまは、事務じむでない。ただ、すがれよ、頼たのれよ、わが腕うでの枕まくらの細こきが故ゆゑか、猫ねこの子こ一ひと匹びつ、いのち委ゆたねては眠ねって呉くれぬ。まことの愛あいの有様ありさまは、たとえば、みゆき、朝あ顔あ日記にじ、めくらめつぽう雨あめの中なか、ふしつ、まろびつ、あ

と追おつてゆく狂乱きやうらんの姿すがたである。君きみひとりの、こいていしゅだ。自信じゆんを以もつて、愛あいして下さい。

一かず豊とよの妻つまなど、いやなこつた。だまって、百円ひゃくえんのへそくり出だされたとて、こちらこちらは、いやな気がするだけだ。なんにも要いらない。はい、と素直すちな返事こたへだけでも、してお呉くれ。すみません、と軽かろい口調くちやうで一言ひとことそつと、おわびをなさい。君きみは、無智むちだ。歴史れきしを知らぬ。芸術げいじゆんの花はなつかびたる小川せうがわの流れながれの起伏きふくを知らない。陋屋ろうおくの半坪はんぺいの台所だいしよで、ちくわの夕食ゆしゆくに馴なれたる言目ごんめの鼠ねずみだ。君きみには、ひとりの良人りやうじんを愛あいすることさえできなかつた。かつて君きみには、一葉いちえつの恋文こひごころさえ書かけなかつた。恥はじるがいい。女体にょたいの不言実行ごんげんじつぎんの愛あいとは、何を意味いみするか。ああ、君きみのぼろを見とどけてしまった私の眼まなこを、私わたし自身みづかみでくじり取とろうとした痛苦くわくの夜々よよを、知しっているか。

人ひとには、それぞれ天職てんしやくといふものが与あたえられています。君きみは、私わたしを嘘うそつきだと言いつた。もっと、はっきり言いつてこらん。君きみこそ私わたしをあざむいている。私は、いったい、どんな嘘うそをついたというのだ。そうして、もっと重大じゆうじやうなことには、その具体的くわてきの結果けつがが、どうなつたか。記録きらく的に

お知らせ願いたいのだ。

人を、いのちも心も君に一任したひとりの人間を、あざむき、脳病院にぶちこみ、しかも完全に十日間、一葉の消息だに無く、一輪の花、一個の梨なしの投入をさえ試みない。君は、いつたい、誰の嫁さんなんだい。武士の妻よしやがれ！ただ、丁家よりの銅銭の仕送りに小心よくよく、或いは左、或いは右。真実、なんの権威もない。信じないのか、妻の特権を。

含羞かんじゆうは、誰でも心得ています。けれども、一切に眼をつぶって、ひと思いに飛び込むところに真実の行為があるのです。できぬとならば、「薄情。」受けよ、これこそは君の冠。

人、おのおの天職あり。十坪の庭にトマトを植え、ちくわを食いて、洗濯に専念するも、これ天職、われとわれはらわたを破り、わが袖そで、炎々の焰あげつつあるも、われは嵐にさからって、王者、肩そびやかしてすまなければならぬ、さだめを負つて生れた。大礼服着たる衣紋竹えもんたけ、すでに枯木、刺さば、あ、と一声の叫びも無く、そのままに、かさど倒れ、失せむ。空なる花。ゆるせよ、私はす

すまなければいけないのだ。母の胸ひからびて、われを抱き入れることなし。上へ、上へ、と逃れゆくこそ、われのさだめ。断絶、この苦、君にはわからぬ。

投げ捨てよ、私を。とわに遠のけ！「テニスコートがあつて、看護婦さんとあそんで、ゆつくり御静養できますわよ。」と悪婆の嘯き。われは、君のそのいたわりの胸を、ありがたく思っていました。見よ、あくる日、運動場に出ずれば、蒼あおき鬼、黒い熊、さながら地獄、ここは、かの、どんぞこの、脳病院に非ずや。我もまた、一囚人、「ひとり！」と鍵の束たば持てるボアマドの悪臭たかき一看守に背押されて、昨夜あこがれ見しテニスコートに降り立ちぬ。

銅貨のふくしゅう。……の暗躍。ただ、ただ、レッド・テエブにすぎざる責任、規約の槍玉にあげられた鼻のまゝるいキリスト。「温度表を見て下さい。二十日以降、注射一本、求めていません。私にも、責任の一半を持たせて下さい。注射しなければいいんでしょう？」「いいえ、保証人から全快までは、と厳格にたのまれてあります。」

ただ、飼い放ち在るだけでは、金魚も月余の命、保たず。いつわりでよし、プライドを、自由を、青草原を！

尚、ここに名を録すにも価せぬ……のその間に於ける鼻たかだかの手柄話に就いては、私、一笑し去りて、余は、われより年若き、骨たくましきものに、世界歴史はじまりて、このかた、一筋に高く潔く直く燃えつぎたるこの光栄の炬火^{たいまつ}を手渡す。心すべきは、きみ、ロヴェスピエルが腫のみ。

二十四日。 なし。

二十五日。

「金魚も、ただ飼い放ち在るだけでは、月余の命、保たず。」(その一。)

われより若きものへ自信つけさせたく、走り書 断片の語なれども、私は、狂っていません。

社会制裁の目茶目茶は医師のはんらんと、小市民の医師の良心に対する盲目的信仰より起った。たしかに重大

の一因である。ヴェルレエ又氏の施療病院に於ける最後の詩句、「医者をののしる歌。」を読み、思わず哄笑した五年まえのおのれを恥じる。厳肅の意味で、医師の腫の奥をさぐれ！

私営脳病院のトリック。

一、この病棟、患者十五名ほどの中、三分の二は、ふつうの人格者だ。他人の財をかすめる者、又、かすめむとする者、ひとりもなかった。人を信じすぎて、ぶちこまれた。

一、医師は、決して退院の日を教えぬ。確言せぬのだ。底、知れず、言を左右にする。

一、新入院の者ある時には、必ず、二階の見はらしよき一室に寝かせ、電球もあかるきものとつけかえ、そうして、付き添って来た家族の者を、やや、安心させて、あくる日、院長、二階は未だ許可とつてないから、と下の陰気な十五名ほどの患者と同じの病棟へ投じる。

一、ちくおんき慰安。私は、はじめの日、腹から感謝して泣いてしまった。新人の患者あることに、ちくおんき、

高田浩吉、はじめの如し。

一、事務所のほうからは、決して保証人へ来いと電話せぬ。むこうのきびしく、さいそくせぬうちは、永遠に黙している。たいてい、二年、三年放し飼ひ。みんな、出ること許り考へている。

一、外部との通信、全部没収。

一、見舞い絶対謝絶、若しくは時間定めて看守立ち合ひ。

一、その他、たくさんある。思い出し次第、書きつづける。忘れねばこそ、思い出さずそろ、か。(この日、退院の約束、断腸のこともあり、自動車の音、三十も、四十も、はては、飛行機の爆音、牛車、自転車のきしりにさえ胸やぶれる思い。)

「出してくれ!」「やかまし!」「どしんもの音ありて、秋の日あえなく暮れむとす。

二十六日。

「金魚も、ただ飼ひ放ち在るだけでは、月余の命、保た

ず。」(その二)

昨日、約束の迎え来らず。ありがとう。けさ、おもむろに鉛筆執つた。愛している、という。けれども、小市民四十歳の者は、われらを愛する術を知っていない。愛し得ぬのだ。金魚へ「ふ」だ。愛していないと、言い切り得る。

夫を失ひし或る妻の呟き、「夜のつらさは、ごまかせるけれども、夜あけが。」あかつきはかり憂きものはなし、とは眠いうらみを述べているのではない。くらきうち眼さえて、かならず断腸のこと、正確に在り。大西郷は、眼さむるとともに、ふとん蹴つてはね起きてしまったという。菊池寛は、午前三時でも、四時でも、やはり、はね起き、而して必ず早すぎる朝食を喫するといふ。すべて、みな、この憂さに沈むことの害毒を人一倍知れる心弱くやさしき者の自衛手段と解して大過なかるべし。われ、事に於いて後悔せず、との菊池氏の金看板の楯の弱さにも、ふと気づいて、地上の王者へ、無言で一杯のミルクささげてやつて呉れる決意ついたら、それが、ま

た、君のからだの一步前進なること疑う勿れ。

営利目的の病院ゆえ、あらゆる手段にて患者の退院はばむが、これ、院長、院主、医師、看護婦、看守のはてまで、おのおの天職なりと、きびしく固く信じている様子である。悪の数々、目もおえども、耳ふさげども、壁のすきま、鉄格子の窓、四方八方よりひそひそ忍びいる様、春の風の如く、むしろ快し。院主（出資者）の訓辞、かの説教強盗のそれより、少し声やさしく、温顔なるのみ。内容、もとより、底知れぬトリックの沼。しかも直接に、人のいのちを奪つトリック。病院では、死骸など、飼犬死にたるよりも、さわがず、思わず、噂せず。壁塗り左官のかけ梯子より落ちしものの左腕の肉、煮て食いし話、一看守の語るどころ、信ずべきふし有り。再び、かの、ひらひらの金魚を思う。

「人権」なる言葉を思い出す。ここの患者すべて、人の資格はがれ落されている。

われら生き伸びてゆくには、二つの途のみ。脱走、足袋はだしのまま、雨中、追われつつ、一汁一菜、半畳の居室与えられ、犬馬の勞、誓言して、巷の塵の底に沈むか、若しくは、とても金魚として短きいのち終らむと、ころり寝ころび、いとせめて、油多き「ふ」を食い、鱗の輝き増したるを紙より薄き人の口の端にのぼせられて、ペちやペちやほめられ、数分後は、けろりと忘れられ、笑われ、冷き血のまま往生とげむか。あとは、自らくびれて、甲斐なき命絶ち、四、五日、人の心の片端、ひやとさせるもよからむ。すべて皆、人のための手本。われの享樂のための一夜もなかつた。

私は、享樂のために売春婦かつたこと一夜もなし。母を求めに行つたのだ。乳房を求めに行つたのだ。葡萄の「かご」、書籍、絵画、その他のお土産もつていても、たいてい私は軽んぜられた。わが一夜の行為、うたがわしくば、君、みずから行きて問え。私は、住所も名前も、いつわりしことなし。恥ずべきことも思わねば。

私は享樂のために、一本の注射打ちたることなし。心身ともにへたばって、なお、家の鞭むちの音を背後に聞き、ふるいたちて、強精さい、すなわち用いて、愚妻よ、われ、どのような苦勞の仕事を了せたか、おまえにはわからなかった。食わぬ、しし、食ったふりして、しし食ったむくいを受ける。

その人と、面とむかつて言えないことは、かげでも言うな。私は、この律法を守って、脳病院にぶちこまれた。求めもせぬに、私に、とめどなき告白したる十数人の男女、三つき経ちて、必ず私を悪しざまに、それも陰口、言いちらした。いままでお世辞たらたら、廁かわやに立ちし後姿見えずなるやいな、ちえっ！ と悪魔の嘲笑。私は、この鬼を、殴り殺した。

私の辞書に軽視の文字なかった。

作品のかげの、私の固き戒律、知るや君。否、その激しさの、高さの、ほどを！

私は、私の作品の中の人物に、なり切ったほうぐむしろ、よかった。ぐうだらの漁色家。

私は、「おめん！」のかけごえのみ盛大の、里見、島崎などの姓名によりて代表せられる老作家たちの劍術先生的硬直を避けた。キリストの卑屈を得たく修業した。

聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はつきりと二分されている。マタイ伝二十八章、読み終えるのに、三年かかった。マルコ、ルカ、ヨハネ、ああ、ヨハネ伝の翼を得るは、いつの日か。

「苦しくとも、少し我慢なさい。悪いようには、しないから。」四十歳の人の言葉。母よ、兄よ。私たちこそ、私たちのあがきこそ、まこと、いつわらざる、「我慢下さい。悪いようにはしないから。」の切々、無言の愛情より発していること、知らなければいけない。一時の恥を、しのんで下さい。十度の恥を、しのんで下さい。もう、三年の

いのち、保っていて下さい。われらこそ、光の子に、なり得る、しかも、すべて、あなたへの愛のため。

その時には、知るであらう。まことの愛の素晴らしさを、私たちの胸ひろくして、母を、兄を、抱き容れて、眠り溶けさせることができるのだという事実を。その時には、われらにそつと囁け、「私たちは、愛さなかった。」

「まあいいよ。人の心配なぞせずと、ご自分の袖のほころびでも縫いなさい。」それでは、立ちあがって言おうじゃないか。「人たれか、われ先に行く」と、たとい、一分なりとも、その自矜つちくだかれて、なんの、維持ぞや、なんの、設計ぞや、なんの建設ぞや。」さらに、笑ったならば、その馬づらを、殴れ！

あなた知っている？ 教授とは、どれほど勉強、研究しているものか。学者のガウンをはげ。大本教主の頭髪剃り落した姿よりも、さらに一層、みるみる矮小化せむこと必せり、

学問の過尊をやめよ。試験を全廃せよ。あそべ。寝ころべ。われら巨万の富貴をのぞまず。立て札なき、たった十坪の青草原を！

性愛を恥じるな！ 公園の噴水の傍のベンチに於ける、人の眼恥じざる清潔の抱擁と、老教授R氏の閉め切りし闇の中と、その汚濁、果していずれぞや。

「男の人が欲しい！」「女の友が欲しい！」「君、恥じるがいい、ただちに、かの聯想のみ思い浮べる油肥りの生活を！ 眼を、むいて、よく見よ、性のつぎなる愛の一字を！

求めよ、求めよ、切に求めよ、口に叫んで、求めよ。沈黙は金という言葉あり、桃李言わざれども、の言葉もあつた、けれども、これらはわれらの時代を一層、貧困に落した。(As you see.) 告げざれば、うれしい、全く無きに似たり、とか、きみ、ごぶしを血にして、たたけ、五

百度たたきて門の内こたえなければ、千度たたかむ、千度たたきて門、ひらがざれば、すなわち、門をよじのぼらむ、足すべらせて落ちて、死なば、われら、きみの名を千人の者に、まことに不変の敬愛もちて千語ずつ語らむ。きみの花顔、世界の巷ちまた、露路の奥々、あつき涙とともに、撒き散らさむ。死ね！われら、いま、微細といえども、君ひとり死なせたる世の悪への痛憤、子々孫々ひまあることに語り聞かせ、君の肖像、かならず、子らの机上に飾らせ、その子、その孫、約して語りつがせむ。ああ、この世くらくして、君に約するに、世界を覆う厳肅華麗の百年祭の固き自明の贈物のその他を以てする能わざることを、数十万の若き世代の花うばわれたる男女と共に、深く恥じいる。

二十七日。

「金魚も、ただ飼い放ち在るだけでは、月余の命、保たず。」(その三。)

人、口々に言う。「リアル」と。問わむ、「何を以てか、リアルとなす。蓮の開花に際し、ほんと言するか、せぬ

か、大問題、これ、リアルなりや。」「否。」「ナポレオンもまた、風邪をひき、乃木將軍もまた、闇を好み、クレオパトラもまた、脱糞せりとの事実、これこそは君等のいうリアルならむ。」笑つて答えず。「更に問わむ、大宰もまた泣いて原稿を買つて下さい、とたのみ、チエホフも扉の敷居すりへつて了うまで、売り込みの足をはこんだ、ゴリキイはレニンに全く牛耳られて易々諾々のふうがあつた、ブルウストのかの出版屋への三拜九拜の手紙、これをこそ、きみ、リアルというか。」「用心のニヤニヤ笑いつづけながらも、少し首肯く。「愚なる者よ。きみ、人その全部の努力用いて、わが妻子わすれむと、あがき苦しむつづ、一度持たせられし旗の捨てがたくして、沐雨櫛風、ただ、ただ上へ、上へとすすまなければならぬ、肉体すでに半死の旗手の耳へ、妻を思い出せよ、きみ、私め、かわつてもよろしゅうございますが、その馬の腹帯は破れていますよと、かの宇治川、佐々木のでんをねらつていることに、気づくがよい。名への恋着に非ず、さだめへの忠実、確定の義務だ。川の底から這いあがり、目さえおぼろ、必死に門へかじりつき、また、よじ登り、す

こし花咲きかけたる人のいのちを、よせ、よせ、芝居は、と鼻で笑つて、足ひつつかんで、むざん、どぶどろの底、ひきずり落すのが、これが、リアルか。「かれ少し坐り直して、「リアルとは、君の様に、針ほどのものを、棒、いや、門柱くらいに叫び騒がずして、針は、針、と正確に指さし示す事なり。」「愚かや、君は、かの認識の法を、研究したにちがいない。また、かの、弁証法をも、学びたるなるべし。われ、かのレクチュアをなす所存なければ、いまの若き世代、いまだにリアル、リアル、と穴てんでんの青き表現の羅紗かぶせたる机にしがみつき、すがりつき、にかわづけされて在る状態の、『不正。』に気づくべき筈なのに、歸りて、まず、唯物論的弁証法入門、アングラインのみを拾いながらでもよし、まず、十頁、読み直せ。お話は、それから、再びし直そう。」かく言い、その日は、わかれた。

リアルの最後のたのみの綱は、記録と、統計と、しかも、科学的なる臨床的、解剖学的、それ等である。けれども、いま、記録も統計も、すでに官僚的なる一技術に

成り失せ、科学、医学は、すでに婦人雑誌ふつの常識に墮し、小市民は、何々開業医のえらさを知つても、野口英世の苦勞を知らぬ。いわんや、解剖学の不確定など、寢耳に水である。天然なる嚴肅の現実の認識は、二・二六事件の前夜にて終局、いまは、認識のいわば再認識、表現の時期である。叫びの朝である。開花の、その一瞬までである。

真理と表現。この両頭食い合いの相互關係、君は、たしかに学んだ筈だ。相剋やめよ。いまこそ、アウフヘーベンの朝である。信ぜよ、花ひらく時には、たしかに明朗の音を発する。これを仮りに名づけて、われら、「ロマン派の勝利。」という。誇れよ！ わがリアリスト、これこそは、君が忍苦三十年の生んだ子、玉の子、光の子である。

この子の腫の青さを笑つな。羞恥深き、いまだ膚やわらかき赤子なれば。獅子を真似びて三日目の朝、崖の下に蹴落すもよし。崖の下の、蒲団をわするな。勘当と言つ

て投げ出す銀煙管。「は、は。この子は、なかなか、おしやまだね。」

知識人のプライドをいたわれ！ 生き、死に、すべて、プライドの故、と断じ去りて、よし。職工を見よ、農家の夕食の様を覗け！ 着々、陽気を取り戻した。ひとり、くらはは、一万円費つて大学を出た、きみら、痩せたる知識人のみ！

くたびれたら寝ころべ！

悲しかったら、うどんかけ一杯と試合はじめよ。

私は君を一度あざむきしに、君は、私を千度あざむいていた。私は、「嘘吐き」と呼ばれ、君は、「苦勞人」と呼ばれた。「うんとひどい嘘、たくさん吐くほど、嘘つきでなくなるらしいのね？」

十二、三歳の少女の話を、まじめに聞ける人、ひとり

まえの男というべし。

その余は、おのれの欲するがまにまに行え。

二十八日。

「現代の英雄について。」

ヴェルレーエ又的なるものと、ランボオ的なるもの。スウィートピーは、蘇鉄の真似をしたがる。鉄のサラリイマンを思う。片方は糸で修繕した鉄ぶちの眼がねをかけ、スナップ三つあまくなつた革のカバンを膝に乗せ、電車で、多少の猫背つかつて、一日すらない顎の下へのひげを手さぐり雨の巷を、ぼんやり見ている。なぐられて、やかれて、いまはくるがねの冷酷を内にひそめて、(断)

二十九日。

十字架のキリスト、天を仰いでいなかった。たしかに、地に満つるの子のむれを、うらめしそくに、見おろしていた。

手の札、からりと投げ捨てて、笑えよ。

三十日。

雨の降る日は、天氣が悪い。

三十一日。

(壁に。) ナポレオンの欲していたものは、全世界ではなかった。タンポポ一輪の信頼を欲していただけであった。

(壁に。) 金魚も、ただ飼い放ち在るだけでは、月余の命、保たず。

(壁に。) われより後に来るもの、わが死を、最大限に利用して下さい。

一日。

実朝みねもろをわすれず。

伊豆の海の白く立つ浪がしら

塩の花ちる。

うごくすすぎ。

蜜柑畑みかんばた。

二日。

誰も来ない。たより寄せよ。

疑心暗鬼。身も骨も、けずられ、むしられる思いでございます。

チサの葉いちまいの手工産で、いいのに。

三日。

不言実行とは、暴力のことだ。手綱たづなのことだ。鞭むちのことだ。

いい葉になりました。

四日。

「梨花一枝。」

改造十一月号所載、佐藤春夫作「芥川賞」を読み、だらしのない作品と存じました。それ故に、また、類なく立派であると思つた。眞の愛情は、めくらの姿である。狂乱であり、憤怒である。更に、(断)

寝間の窓から、羅馬の燃上を凝視して、ネロは、黙した。一切の表情の放棄である。美妓の巧笑に接して、だまつていた。緑酒を捧持されて、ぼんやりしていた。かのアルプス山頂、旗焼くけむりの陰なる大敗將の沈黙を思つよ。

一嚙の齒には、一嚙の齒を。一杯のミルクには、一杯のミルク。(誰のせいでもない。)

「なんじを訴つる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ。恐くは、訴つる者なんじを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんじは獄に入れられん。誠に、なんじに告ぐ、一厘も残りなく償わずば、其処

をいずること能わじ。」(マタイ五の二十五、六。)

晩秋騒夜、われ完璧の敗北を自覚した。

一錢を笑い、一錢に殴られたにすぎぬ。

私の瞳は、汚れてなかつた。

享樂のための注射、一本、求めなかつた。おめん！の声のみ盛大の二、三の剣術先生を避けたにすぎぬ。「水の火よりも動きを知れ。キリストの嬭々の威厳をこそ学べ。」

他は、なし。

天機は、もらすべからず。

(四日、亡父命日。)

五日。

逢つことの、いま、いつとせ、早かりせば、など。

六日。

「人の世のくらし。」

女学校かな？ テニスコート。ポプラ。夕陽。サンタ・

マリヤ。(ハアモニカ。)

「つかれた？」

「ああ。」

これが人の世のくらし。まちがいなし。

七日。

言わんか、「死屍ししに鞭打つ。」言わんか、「窮鳥を圧殺

す。」

八日。

かりそめの、人のなさけの身にしてみても、まなこ、うる

むも、老いのはじめや。

九日。

窓外、庭の黒土をはさばさ這いずりまわっている醜みにくき秋の蝶ちゅうを見る。並はずれて、たくましが故に、死なず在りぬる。はかなき態には非ず。

十日。

私が悪いのです。私こそ、すみません、を言えぬ男。私のアクが、そのまま素直に私へ又はねかえって来ただけのことです。

よき師よ。

よき兄よ。

よき友よ。

よき兄嫁よ。

姉よ。

妻よ。

医師よ。

亡父も照覧。

「うちへかえりたいのです。」

柿一本の、生れ在所ざいしょや、さだ九郎。

笑われて、笑われて、つよくなる。

十一日。

無才、醜貌しゅうぼうの確然たる自覚こそ、むっと凶太い男を創る。たまもの也。(家兄ひとり、面会、対談一時間。)

十二日。

試案下書。

一、昭和十一年十月十三日より、ひとつき間、東京市板橋区M脳病院に在院。パヴィナル中毒全治。以後は、
一、十一年十一月より十二年(二十九歳)六月末までサナトリウム生活。(病院撰定は、S先生、K様、一任。)
一、十二年七月より十三年(三十歳)十月末まで、東京より四、五時間以上かかって行き得る(来客すくなかなるべき)保養地に、二十円内外の家借りて静養。(K氏、ち

くらの別荘賃して下さる由、借りて住みたく思いましたが、けれども、この場所撰定も、皆様一任。)

右の如く満一箇年、きびしき撰生、左肺全快、大丈夫と、しんから自信つきしのち、東京近郊に定住。(やはり創作。厳酷の精進。)

なお、静養中の仕事は、読書と、原稿一日せいぜい二枚、限度。

一、「朝の歌留多。」

(昭和いろは歌留多。「日本イソップ集」の様な

小説)

一、「猶太の王。」

(キリスト伝。)

右の二作、プランまとまっていますから、ゆっくり書いてゆくつもりです。他の雑文は、たいてい断るつもりです。

その他、来春、長編小説三部曲、「虚構の彷徨」S氏の序文、I氏の装幀にて、出版。(試案は、所詮、笹の葉の霜。)

この日、午後一時半、退院。

汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。
天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の
父はその陽を悪しき者のうえにも、善き者のう
えにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ
者にも降らせ給うなり。なんじら己を愛する者
を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然^{しか}する
にあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝るこ
とがある、異邦人も然するにあらずや。然らば
汝らの天の父の全きが如く、汝らもまた、全か
れ。

底本：「太宰治全集 2」ちくま文庫、筑摩書房
1988（昭和 63）年 9 月 27 日第 1 刷発行
親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975（昭和 50）年 6 月～1976（昭和 51）年 6 月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999 年 8 月 30 日公開

2004 年 3 月 4 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お断り：この PDF ファイルは、青空パッケージ（<http://psitau.kitunebi.com/aozora.html>）を使って自動的に作成されたものです。従って、著作の底本通りではなく、制作者は、WYSIWYG（見たとおりの形）を保証するものではありません。不具合は、<http://www.aozora.jp/blog2/2008/06/16/62.html> までコメントの形で、ご報告ください。